

◆オーストラリア研修を終えて

藤井 亮佑（社会学研究科 博士前期課程）

ある社会における人間の営みを観察し、分析概念を用いてその現象の構造をみる。そして、そこに理論を導き、記述する。社会学の土俵で研究していくうえで、この手続きを踏むことは基本的なことだが、その研究が一社会を読み解くことにとどまらず、広く人間生活一般に当てはまる普遍性を示唆しているかは、研究価値を高めるうえでも、今後の研究活動を発展していくうえでも、極めて重要なことである。そのためにも、研究対象である事象に没頭するだけでなく、そこから自身を解き放ち、時に広く社会全体を俯瞰し、また時に無関係と思われる事象にも足を踏み入れ、その研究が研究史においてどの文脈・領域で評価されるのか、どれほどの射程を持ちえているのかを把握しておかなくてはならない。だからこそ、海外という環境に自身を投げ入れてしまうことが、英語での研究発表という名目課題への挑戦に限られるのではなく、その他様々な経験も付随して、研究能力の涵養という貴重な機会となるのである。

今回、参加させていただいたのは、関西学院大学先端社会研究所が大学院教育支援事業としておこなっている、社会学研究科大学院生を対象にした2015年8月のオーストラリア国立大学（ANU）におけるセミナーである。まだ、国内での研究会報告の経験もないが、現段階で掴める機会は進んで挑戦し、有効に消化していくべきであった。英語での発表という課題も今回の魅力の一つだと心得て、これに応募した。研究発表の準備段階では、今回のオーストラリア研修の引率者である先端社会研究所専任研究員の辛島理人氏に報告内容の添削・ご指導をいただいた。

研究報告の内容であるが、自身の卒業論文の練り直しと整理を経て、新たに構成していくことにした。卒業論文では「終活」を研究対象とした。ここで、簡単に終活を説明しておく、一人暮らしや夫婦のみの高齢者を中心に、周りに迷惑をかけたくないとの思いなどから、葬儀、墓、遺産相続など、自身が死を迎えた際の準備を生前にしておくといった行為が総称して終活と呼ばれ、それが流行現象となっていることといえる。

まず、研究報告の要約を日本語で作成する。ここで卒業論文の議論における構成のいたらなさなどを改めて確認することとなるのだが、時間をおいて自身の研究を忘却し、対象化することで、さらに議論を発展させる道筋がみえてくる。一度、まとめ上げた資料も、それぞれが異なる文脈どうしの集まりであるように見え始める。そのために、新たに構成の整理をすることが、研究要旨をより締まったものにするために必要となるのである。

そして、これを英語に直していくのだが、もちろん終活という言葉もその一つであるが、英語にはない言葉がある。それらは日本の社会状況による特殊な産物であるが、高齢化や個人化、経済の停滞、宗教儀礼、消費構造の変化という枠組みを用いて説明することで、それが近代社会という大きな文脈のなかで登場してきた現象であり、当然、海外でも通用する主題となることがわかるのである。

さらに、研究内容を言語の障壁のない写真や図を用いて伝えることも手段のひとつである。新聞も内容を言葉に抜き出して伝えるだけでなく、日本の新聞自体がどのようなものなのか、記事そのものの画像を見せることで、見出しの大きさ、貼付された写真からいかにして伝えられているかな

どが感じられるであろう。発表の時に用いた新聞記事の納棺体験をおこなう男性や、海上に散骨するツアーに参加した女性を捉えた写真、また自身が終活フェアを調査した際に出くわした遺影撮影会で撮った写真など、日本で見られる現象を言語に変換しないかたちで、海外に紹介することの方がその場にいる人々に考えてもらう時間を提供できると考えた。自身の導き出した理論を提示するだけでなく、その場にいる方々にも考えてもらう機会を用意したほうが、その後のディスカッションもより良いものとなるからだ。

このようにして、興味深い発表になるよう斟酌しながら発表原稿とパワーポイントを練り上げ、発表の予行練習を何度か経た後にオーストラリアへ飛びたった。

真夏の日本から、真冬のオーストラリアへとわずか、約9時間のフライトで移動する。Tシャツの上から冬物のコートで身を包み、シドニーを経由し、ANUのあるキャンベラへと到着した。灰色の空のもと、キャンベラの街並みを車中から見渡す。広大な丘陵に道が続いている。首都というと、街には人が溢れかえり、所狭しにビルが立ち並ぶ姿をイメージするが、ここキャンベラは司法、行政、教育機関等の国の主要機関を中心に区画が整備された計画都市であるために、それらの建物が広大な土地に平たく構えている。そして、行政府の前では、キャンベラの先住民であるアボリジニの先住権の主張をするテントが対峙している。到着の晩は、Simon Avenel氏（ANU: Convener of Japan Institute）の主催の歓迎会で、今回の関係者の方々との交流を果たした。帰宿時には雲間に、南半球のシンボル南十字星が光っていた。

翌日には、院生ワークショップとして、ANUにてわれわれの研究報告会が催された。大学構内にある発表会場には、海外の日本研究の研究者や、日本からの留学生の方々が集まり、各々の日本らしい研究の報告に耳を傾ける。各報告後には、日本語だけでなく、英語でも質問される。しかし、それは自分の報告が相手に伝わった証拠であるから、むしろよろこばしいものである。私の研究報告では、特に重要な単語は強調して伝えることに努力した。用意したスライドに写真や画像が映ると、それを見ている人々の頷く様子や、ほくそ笑む様子がこちらからも確認できた。報告後のディスカッションでもいくつか質問をいただいた。質問には、報告中に閃いたことなども添えて答えていく。報告を聞いていただいた方々が、それぞれの解釈で投げかける問いによって、自身の研究の重要な点が確認でき、また伸びしろが増えていく。海外という場に置ける初の研究報告となったが、どうにか形になったようである。

報告会は以上で済んだが、翌日には National Library Australia を案内していただける機会を得た。オーストラリアの地理的状況もあってか、ここではアジア各国の書籍の所蔵も少なくなく、日本の書籍はもちろん、雑誌類の所蔵も非常に多く確認された。ヨーロッパから遠く、アジアに近いオーストラリアという立ち位置は、西欧によるアジア研究の拠点として独特の文化を築いてきているようだ。また、滞在中、キャンベラやシドニーの戦争記念展示を見るに、まず、第一次世界大戦が大きく取り上げられているが、第二次世界大戦については、対日本との戦況についての展示がかなり大きな枠を割いている。日本国内では対米もしくは東アジアでの戦線という文脈で語られることの多い第二次世界大戦であるが、オーストラリアの文脈には対日本が大きく位置づけられているのである。これは、オーストラリア滞在中、自身が他国へ視点を移動させることによって初めて認識する気付きとして象徴的な出来事であった。

また、シドニーでは、Japan Foundation（国際交流基金）を訪れ、担当者からオーストラリアで日本語を学ぶ学生たちについての話を伺う機会を得た。現在では実用言語として日本語を学ぶ学生が減少しているようだ。実際には、日本以外からのアジア系留学生は増加しており、シドニーは多文化都市として国内では見られない世界市場の変化や躍動の渦中にあるようであった。

総括すると今回の研修で得たものは、根源的なモノの姿を問うために、新たな経験を糧にしている姿勢であったように思われる。それは、研究報告でのそれぞれの解釈から出る質問に、オーストラリアの文脈にみる歴史観に、言語や、街並み、食事、動植物など、挙げればキリがないが、それら未だ見ぬ経験がもたらす新たな視点の絶え間ない導入によって、余分なものが削ぎ落とされたモノの本質がみえてくるのではないだろうか。